

願し給ひ、又 後宇多天皇は勅使を神宮に派遣し給ひ敵國降伏を祈願し給うたと拜承して
ります。

そして、吾等の祖先は、前後十四年間の實戦と、六十年間の戦時體制に勝ちぬいたので
あります

大東亞聖戰第二年の劈頭に當り、長くも皇國の大事を皇祖の神靈に祈り給へりと洩れ承
る吾等民草は、時局の實に並々ならぬことを感ずるのであります。まことにその通りであ
ります。日本は今、實に容易ならざる戦ひを戦ひつゝあるのであります。吾等國民たるも
の、粉骨碎身、只一すぢに職域挺身の道を全ふすべきであります。

「米英打倒」「米英撃滅」皇恩に報い奉る道は只此の一途であります。

皆さん、頑張りませう。今日も決戦です。明日も決戦です。皆さんの汗と力によつて採
掘された石炭は、軍艦を組みたてゝります。飛行機をつくつてゐます。皆さんとかうして
語りあつてゐる間にも、北の空に、南の海に米英を撃滅する砲彈となつて飛んでゐるので
あります。

鑛山もまた戰場です。皆さんは其の戦場の將兵であります。戦士であります。只大君の

みたてとなつて頑張りませう。

當山の標語である。全山一つ心に明るい心で、大東亞聖戰を勝ちぬく爲に誓つて頑張り
ませう。

終りに申します。一日一日と寒さが加はる此の頃、どうか身體を大事にして風邪などひ
かぬ様頑張りぬいて下さい。

では皆さん、何もお國の爲めです。立派な鑛山の將兵となつて、しつかり頑張つて下さ
い。私は青森縣のはてに居つて、毎日心からお祈り致します」

語り終つて吾れにかへつた時、全山の靈氣が凍つて私を包んでゐる。午前六時、零下十四度
の坑口には、戦士の頭上に怪しく光つてゐる二百餘の炭坑電燈ばかりで、寂として聲さへない。

世界の歴史を今更復習するまでもなく、其の國が亡んで、其の民族の安住の地を求めようと
しても、それは夢にも及ばぬことである。勝たなければならぬ。なんとしても勝ちぬかなけれ
ばならぬ。

常時内省

他山有石

「人のふりみてわがふり直せ」

他人の缺點はよく見えるが、己れの缺點はなかく分らぬもの、自省の訓として他人の缺點を靜かに考へる様になれば、決して他人の缺點を笑ふ心にはなれない。井堰の蛙が大海を知らぬと同じ様に、自惚れの心がどこかにひそんでゐる間は、どうしても向上の一途に眞剣な研究をつゞけることが出来ぬ。

「よきはよしとし、悪しきは悪しとして、素直に己れを省みよ」

視察の時、批評會の時、必ず言ふことではあるが、若い同人の多いだけになかくおさまらぬことがある。

「悪いところは忘れて来てよろしい。明日から、わが學園にとりいれていゝところだけもつて来ていたゞきたい」

内省するこの一年には、さうしたことをくりかへして同人に語りあつてゐる。研究會に、講習會に、視察に、必ず一度は出席しなければならぬことになつてゐる。わが學園では更に一晩泊りの合同視察がある。それらの報告會には必ず同人全部が報告することになつてゐる。その報告によつて、見ざるところをみ、聞かざるところをきいてお互に經營の糧としてゐる。

見聞を廣くすることは、修養の大いなるものゝ一つである。教育者としての健全なる常識も見聞を廣くすることによつて培はれることが多い。ひとり學校教育ばかりでなく、あらゆる社會の事象を視察見聞することを忘れてはならぬ。縣内だけでは見聞がせまい。奥羽六縣に足を入れても満足ではない。出来得れば、内地から九州、北海道まで一巡してほしいものである。更に、大陸に足を一歩でもふみ出したら有りがたいことである。今後の日本の教育姿態がおぼろげながらも分つた様な氣がする、そして、青森縣の、今、自分の經營してゐる町なり、村な

りの教育的信念が、愈々はつきりすることであらう。一校を經營するにしても、一學級を經營するにしても、此の信念があつたら、どれだけ心強いかならぬ。

しかし、十人が十人の教員に凡てを望むことは出来ない。何故なれば、金の問題、時間の問題がこれを許してくれぬからである。従つて、やむを得ないことではあるが、お互ひはさうした機會を與へられるまで、せめてさうした見聞の廣い人にあつて、間接的に見聞をひろくする心構へを忘れてはならぬ。

一日、ある視學さんがいろ／＼雑談をした時、

「視學になつて有りがたいと思つたものゝ一つは、見聞の廣くなつたといふことである。讀書も必要にせまられて讀ませられるが、見聞の讀書の廣くなつたことによつて、一郡の

教育的動きは、はつきり眼の前にうかんで来る。」

と言はれたが、もつともなことである。附屬生活八ヶ年と、視學生活六ヶ年で縣下の教育の動きが、隅から隅まで分つてゐる様な氣がしてゐる私は、同人の

「ある力」を。

「あるべき力」

にまでひきあげようとする無理も手傳つて、かへつて邪魔になる苦痛に追ひ込められることもあるが、見聞の力によつて、どれだけ私の信念を強くしてくれたかは分るのである。また、同人へも言ひ得るのである。

最近は何人一人残らず、視察と、講習と、研究會に出かけてゐる。私費をもつて、東京の講習へ出かけたのは四人までである。相すまぬことゝは思つてゐるが、その精進の心には感謝をしてゐる。残つた同人は、また報告會によつて、同じ様に見聞を廣くすることが出来る。

見捨てゝはならぬ。聞き捨てにしてはならぬ。どんな社會事業を見聞しても、己れに反省する糧がある筈である。吾々は素直に、それをとりいれることを忘れてはならぬ。

美 化

わが學園にお出でになられた方は、きつと奉安殿の前の美しい花壇をみられたことゝ思ふ。

大げさに言ふと小さな庭園と言つてもいゝかも知れぬ。春 春に、夏は夏に、秋は秋に、季節の美しい花が、冬の雪空になるまで咲いてゐることに氣付いてくれたこと、思ふ。是れは園藝に興味をもつてゐる同人が、子どもを相手に此の一二年の間に仕上げた美化作業の一つである。日曜でも祭日でもひまさへあれば鎌をもつてゐる。

「少し休んだらいいでせう」と言ふと

「おかげさんでこんなに丈夫なからだになりました」とかへつて感謝の言葉で答へられる。

真心の響きは自ら言葉にあらはれて来る。学校長の命なるが故に、やむなく動く心からはかうした言葉が出て来ない。

「おかげさんで身体が丈夫になりました」

なんとといふ有難い言葉であらう。己れを無にして他に之を求めざる道の姿は、決して理窟の世界から来るのではなく、黙々として行じてゐる日々の生活から素直に育つてくるのである。この同人は、中學校を卒業した助教の先生で、遂ひこの間准訓導になつたばかりである。教壇

にたつてやうやく二ヶ年を過ぎたばかりである。三十年近くのがい間教壇にたつて何かを求めようとあせつてゐる己れのあさましい姿に比べて、まことに豊かに育つてゐる。

小庭園は奉安殿の前を美化してゐるだけでなしに、校舎全體にやはらかな感じを與へてゐる。學校はいかめしい感じをもつてゐるばかりではならぬ。その間にやはらかな温かい感じをもつてゐるのでなければならぬ。張りきつただけの弓はひよつとしたはづみに折れる心配がある。僅か三すぢの糸で千變萬化の美妙的な音をきかせる三味線には、人の知らないゆるやかなしかけが工夫されてゐるときいてゐる。嚴にして寛、寛にして嚴、學校經營にも忘れてならぬ條件の一つである。同人の一人がなしたこの作業が、さうした大きな力をもつてゐるようとは、出来あがつた今日始めて知つたといふことでは、あまりにも鈍な學校長だと言はれることであらうが、奉安殿の前に靜かに最敬禮をする時、こみあげて来る毎日の新らしい感謝の心は、常にさう思はせるのである。

女の子ばかりを教へてみてはじめて気が付いたと言へば、随分今までぼんやりした生活をして来たものだと思はれるが、時々裁縫室へ集つて貰つて、何かお話をすると、ものゝ二十分とたゞないうちに姿勢が亂れてくる。右に動いたり、左へ動いたり。まるで勝手に疊、ランゴでもしてゐる様にざわついてくる。私はびつくりしていくたびとなくたしなめてみたが、どうもがまんが出来ぬらしいのである。男の私でさへ三十分位はなんでもないので……と驚いたもの。これはひとり私の學校の子どもばかりでないことを思ふと驚いてばかりも居れないので「その罪を子供にせめるよりも」と心付いたのは座ることの訓練である。朝禮の時十分間床の上で静坐することにしたのはこれからである。もつとも静座することには別な目的もあつてのことではあるが、それが多少の修養になつたものか、此の頃はさう座ることが苦痛でない様に見える。聞く態度も自然に馴致されたが、なんとなしに落ち付いて来た氣風の見えることを有りがたく思つてゐる。

椅子にすはつて育つたあとをみると、いかにもオ、テン、バ娘でそつつかしく見えるが、疊にすはつて育つた娘はいかにもしとやかな感じを與へる。

まことに座つてゐる姿位安定した姿はない。何かの訓話をする時でも、子供を立たした場合と、腰をかけた場合と、座らせた場合と、全く話す心の動きはちがふのである。

一日の學校生活をふりかへつてみても、座つて何かをする時と言へば、裁縫の時間だけである。その裁縫の時間も此の頃は座らせないで、腰をかけて教へてゐる先生が馬鹿に多くなつて来た。裁縫室がないとか、同じ時間によつつかつたと言ふこともあらうが、本來が座るべくたてられた家に育つてゐながら、學校の生活にさうした時間が見出されないとすれば、いよ／＼考へ直して見る必要があるわけである。西洋人でさへ、此の頃はだん／＼ひくい椅子に座らうとしてゐるといふことをきいてゐる今日、裁縫の先生はよほどしつかりしてかゝらなければ裁縫の時間にかへつて女らしさの美を忘れてゐることが多いのである。正しく座つて丹念に針／＼縫ふて行く間に、女としての、母としての力が培はれて行くのである。

研究授業などで公開する時は、あまりにお行儀がよくて、鼻をすゝる子供さへ容易に見當らないが、何かの拍子に一寸のぞいてみると、まるで横ひざの陳列會の様なお行儀に出會ふことがある。是れでは研究授業も臺なしだと言はねばならぬ。平常が大事なのだ。作法の實習が平常のしつけにまで落ちて来るのでなければ、教育もありがたいものでなくなる。一週二時間な

り、三時間なりの裁縫の時間だけでも、正しく座らせて女のしつけをしてほしいものである。さうしたことを考へると、朝禮十分間の静座はいろ／＼な方面から尊い意味をもつてくる。

眞髓寸言

「刀の鑑定を學ぶには最初から最上第一の刀を見抜くことに専心することである」
面白い言葉である。教壇修業に於ても、あの先生——この先生——と數多くの先生を眞似るよりも、是と信する師の眞髓を會得すべく精進することが何より大事である。ましていろ／＼な主義主張に迷はされて、毎日の教壇がフラ／＼してゐる様では、教師自らの問題ではなく、師を唯一の道案内として學習してゐる四十、五十の大事な教へ子の一生の問題である。

「マコトの道は天地人を通じた宇宙の大道であつて、天にも眞あり、地にも眞あり、又人にも眞あり、この三者を貫いたマコトの大道程力の強いものはない。維新の時に江戸城に血

塗らずして維新の大業を爲すことの出来たのは、實に山岡鐵舟の力であり、鐵舟の「眞」の精神によつて成就することが出来たのである……」
と誰かと言つた言葉を今思ひ出されて、自らの經營の上に此のマコトの力の及ばざることを事毎に思ふてならぬのである。

鼎洲が松葉を一つ一つひろつて居るのを見た一僧が

「今に掃きますからそれに及びますまい」と申上げると、鼎洲はその顔を見入つて

「今と言ふことは、道を學ぶものゝいふことではない。一つひろへば一つだけ清められるではないか」

とさとされた。大事な人の子と道を行じて育つて行かなければならぬ吾々教壇に立つもの、この心の底まで徹してゐる力を忘れてはならぬ。

人をうらむではない。悪人となつて吾が子の幸を祈る心も、善人となつて吾が子の幸を祈る

心も、所詮は吾が子を愛する親心なればこそである。吾が子を愛する一念からすれば、善も悪も所詮は親の心に差別があらう筈はない。

人をうらむではない。人をうらむ心があつたら自らをうらめよ。善しと言ふも、悪しと言ふもそれは他人の言ふことであつて、親の心はたゞ子を愛するだけのことである。もしそれが本然の姿になつて善と悪とを悟つたとすれば、そは一切を清算する死の直前のことである。人をうらむではない。吾等はたゞ教壇にたつて吾が教へ子を愛すればいいのである。

反 省

(1) 實力養成

(イ) 何んと言つても實力がなければならぬ。實力なくしては一切の理論は通らない。一年は一年としての實力、三年は三年としての實力、六年は六年としての實力、しかもその實力は充實してゐなければならぬ。それには、教師自ら求めよといふことである。教師に求

むる心がなければ、兒童に求むる心が培はれぬ。教師の一舉手一投足、みなこれ兒童の糧となるのである。これは、同人の最も心すべきことであらう。

(ロ) 教壇、研究工夫に精進を忘れてはならぬ。教へられたこと、指導されたこと、みな素直にうけて眞剣なる教壇に立つことである。出来が悪いといふことは、兒童の出来が悪いのではなく、教師が出来を悪くしてゐるのである。研究工夫さへすれば、必ず教壇に進歩をみる。變なことだが、出来が悪いといふ學級をかりて私が教壇にたつてみると、決して出来が悪いはない。殆んどが舉手することを皆さんもみてゐる筈だ。何も努力です。研究です。工夫です。そして實力をつけることが何よりも大事である。

(ハ) 授業案は自分の力で書くことである。教材を読み、教師用書をよんで自分の力で書くことである。眼前の子ども、毎日教へてゐる子供の力にたつて計畫をたてることである。月々の雑誌の授業案は、毎日みてゐる自分の教へ子への計畫ではない。そのまゝ書きうつして教壇にたつてはならぬ。分らなかつたら先輩にきくことである。子供を知つてゐる先輩に教を乞ふことである。

(ニ) 僅か四十分の時間をそのまゝにしてはならぬ。休憩時間は遊ぶ時間ではない。準備の

時間である。一分でも、一秒でも子供の指導をおろそかにすれば、それだけ子供の躰が亂れる。休憩時間は職員室へ來ることを忘れ、教室にあつて學習環境を整理することに専念する努力をもたねばならぬ。そして、實力附與の工夫を忘つてはならぬ。

(ホ) 叱つてはならぬ、叱つて實力がつくのであつたら教育もまた容易なものであらうが、それでは子供の心が育たぬ。叱るだけの熱意があつたら、叱らずにすむ方法を考へることである。さわぐことは子供の自然だ。さわぐ暇を興へないで善導するのが教師の責である。あたゝかなふところにおいて靜かに内なる心をよびさましてくれることである。求むる心さへ動いてくれば、自ら力が湧いてくるのである。躰が立派だと言はれる學校へ行つて、監視の眼におづく／＼してゐる子供の姿をみると、寧ろ可哀さうになつてくる。廊下に立ちん坊させたり、職員室へひつばつて來て叱つたりすることは、決して躰の正しい方法ではない。心すべきことであらう。

(2) 氣 魄

(イ) 教師先づ氣魄をもつことである。「肚からの聲」是れは忘れてならぬ合言葉である。しかし、氣魄は内にだけ求めようとしてもなか／＼得られない。外に求めて内にこたへる

ことも考へねばならぬ。聲の高いばかりが氣魄ではない。低くつても、ぐつと肚から出て來る聲、力一つばい、精一つばいの聲、それが氣魄なのである。外に氣魄を求めると形からである。形から氣魄を養ふ手が、りは返事させることである。

(ロ) 「ハイ」と正しく返事させることである。其處から子供の氣魄が出てくる。國民學校が躰を重んじて「ハイ」と返事することを求めてゐるからの問題ではない。國民學校が小學校であつた時、すでに求めてやまなかつた大きな問題であつたのである。自らの態度を明かにして、其處に精魂を打込んで行く時、なんで氣魄の出ないことがあらう。よし、それがまづいものであつても、己れのものであつたら、精一つばいである。

(ハ) 述語をはつきりさせることである。意志表示があいまいな時は、決して述語がはつきりしない。即ち、言ひ切る力がないのであるから氣魄も出て來ないのである。言ひ切る氣魄は必ず述語をもつてくることを活かして、述語をはつきりさせる錬成をすることが大事である。

(ニ) 答へる時は姿勢を正しくさせることである。正しき姿勢をとると、自ら考へる力も加つて、ひとりで氣魄が出てくる。正しき姿勢はすべてを眞剣にしてくれる。眞剣なる返

事は必ず相手の心に響かすにはをかない。また止しき姿勢は師に對する禮ともなる。

(ホ) 眼を一點に集中させることが大事である。教師の眼と、兒童の眼と常にとけあつてゐるあたゝかさ、からみあつてゐる眞剣さをみる様でなければならぬ。全兒童をだきあつてゐる眼、たゞの一人も落伍させまいとするあたゝかな眼、それがそのまま兒童の眼に働くのでなければならぬ。間髪を入れぬ兒童の力強い答へは教師のさうした眼の働きによつて發せられる、第一義的の發問でなければならぬ。眞剣に答へなければならぬ、發問しながら机間を散歩する様な態度では、決して兒童の氣魄を培ふことは出来ない。

(ヘ) 舉手をはつきりさせることである。右でも左でも、それは教師と兒童との約束であるから何れかに一定すればいゝので、一本一本あがる其の序には、全力をこめることである。従つて、知らざることは知らずでよい。いゝかげんな舉手をする様なことがなく、あげた以上己れの所信を貫く舉手であつてほしい。もしさうした心があれば、「ハイハイハイ」などゝ空中で遊戯をしてゐる様な舉手がない筈である。「ハイ」とあげたら、動かぬ舉手であるべき筈である。此の點は、どこの學級にもまだく見えぬ。氣魄は、さうしたところに培はれてゐることを知らねばならぬ。

(ト) 板書は丹念に書くことである。一字一句、全心全力で書くことは、無爲の裡に力を養つてゐるのである。同時に、板書の一字を指すにも、おろそかな態度ではなく全心を注ぐ態度であらねばならぬ。それが、そのまま氣魄となつて兒童に培はれて行くことであらう。無爲の感化は理窟ではない。只實踐によつて體得されるのである。

(チ) 教壇を戰場と考へることである。號令一つまちがつたら、味方の全滅となるのだと考へたら、發問も、また、答へもおろそかに出来ない。まして、窓越しに今日の青空を心配しながら、鮎釣りなど考へては、氣魄どころの問題ではない。教壇にたつたら、教壇に専念することである。その態度があつてこそ、兒童への氣魄も培はれるのである。姿勢、眼舉手、返事……それらはすべて氣魄のあらはれでなければならぬ。

(3) 現地教育

國民學校の教育は現地教育でなければならぬ。師弟同行其の場に行するのでなければならぬ。二十六名一校一心、小さな王城にたてこもる様なことがなく、常に、一校の上になつて、學級を問ふことなく、學年にこだはることなく、現地教育に全力を注ぐことである。「廊下の歩き方」「敬禮の仕方」「二列通行」「左側」も「紙屑」もみなこれ現地教育に徹底する決心をも

たねばならぬ。

最後に結論として申述べたい。学校には学校の空氣といふものがある。學級には學級の空氣がある。二分や三分で分るまいと思ふその空氣は、實に不思議な力でもつて分るのである。尤もあつた雨天の日では、それでなくとも暗い校舎では、日本晴れのした心よい日に比べて、存分にその氣分を左右はするが、とにかくさうした雰圍氣にふれ得ることは、「勤」とか「靈感」とかいふ言葉で言ひ得ることと思ふ。

まア、お互ひ急がず、あせらず、最善の努力をしよう。そして、來年は、「なる程素直に努力してくれたなア」とよりよい感じをもつて、よろこばれる様にしよう。

よしや校舎が古びはてゝこれ以上暗くなつても、お互ひの心は、一日／＼明るくなつて、一日／＼精進の輝かしさを、教へ子と共に育つて行く様切望してやまぬのである。

それにしても、學校長は不在勝、あてにならぬ力であるから、どうか教頭を先陣にたてゝ、各部の計畫をぐん／＼實施して貰ひたいものである。

要は一校一心、和協の精神を發揮して、教壇修行の實を擧げること、最善の努力を惜んではならぬと言ふことである。理念にたつて實踐に生きようとしても、それでは時がまつてくれ

ない。教壇の吾々は、一切を専念して、實踐の生活から、理念の向くところに落付くことが大事ではないかと思はれてならぬ。

銃

後

銃

後

海ゆかば水漬く屍山行かば草むす屍

大君のへにこそ死なめかへりみはせじ

澄み渡つた大空の校庭に、朝の會をする千三百のいたいけな兒童が、心靜かに奉安殿を奉拜し、感謝の黙禱をさげつゝ感激のこの古歌の奏樂をきく時、ひとりでに身うちにあふれ出て來る力を感じるのである。

遠くは文永、弘安の役を初めとし、近くは日清日露の戦役に、さては滿洲事變に、或は大東

亞戦線に、只御一人の御馬前に一命をさげまつた祖先先輩を、また現に今その第一線に一命をさげつゝある將兵を思ふ時、なんとしてもこのまゝでは居れぬと、ひたすらに少國民の育成に身命を賭して、日々の教壇に精進しなければならぬ大きな力を感じるのである。

國民學校も最早臨戦態勢を全く整へて、たゞ進撃の一途を辿つてゐる。慰問文もかいてゐる。慰問袋も送つてゐる。遺家族への勞力奉仕もしてゐる。遺兒への慰問も講じてゐる。慰安の夕も開いてゐる。獻金もしてゐる。小さい銃後の戰士として、たゞお國の爲にと勉強してゐる。かうした眼の前の兒童の姿をみていると、泣けてくならぬのである。銃後の教育に少國民の訓練に、青年の教練に、國民學校の教師は今一念お國の爲に、晝夜の別なく一生懸命になつてゐるのを見ると、大東亞戦争がこれから何年續いたとしても、びくともしない力強さがからだ一ぱいにひろまつてくるのである。

銃 だが、ゆめ、心をゆるめてはならぬ。事變も七年のながきをすぎて、大東亞戦争の第三年になつてゐる。砲煙飛び散る戦線だけが戦場ではない。遠く砲彈を海の彼方にきく國土全體が戦場になつたのである。ひとり銃をとり劍を振ふ將兵ばかりではなく、銃劍をもたない老人も子供も國土にあつての戰士となつたのである。堅忍持久も、物心一如も、軍民一致ももう言葉と

して聞いてゐるのではなく、國土をあげての體當りでなければならぬのである。銃後を守る國民のうちに、いさゝかでもこの心に狂ひがあつてはならぬのである。吾等は其處にも教育の眼を向けなければならぬ。

「國民は九千露里の異人境に奮闘しつゝある同胞を捨て、全く顧みず、之で日本に勝てる道理はない」

是れは日露戦役に惨敗を喫した總帥の「クロバトキン」が悲憤の筆を留めた回想録の一節である。

「日本の戦勝の大半は銃後の力に依る」

と、當時の日本を賞した英國公使の言葉と思ひ比べて、銃後の支援の如何に絶大であるかを
知る時、軍民一致必勝の信念をもつて大使命達成に努力しなければならぬことは、こゝに言を
弄するまでもないことである。

第一回大詔奉戴日にあつて、

「民強くして兵強し」

と言われた報道部平出大佐の言葉は、國民の鐵石の覺悟を促した切實なる叫びであることを

知るのである。

「日本人のこの強さ」

それは、戦線の勇士と銃後の國民をつなぐ鐵鎖であらねばならぬ。戦闘に勝つても、戦争に
勝たなければ眞の戦捷國とはならぬことを、決して忘れてはならぬ。

今や帝國は世紀の運命を決し、新たな世界の秩序を決する戦を戦ひつゞけてゐる。もとよ
り此の戦はたゞに今日の戦ではない。即ち、我々國民が皇運扶翼の道に生きんとする限り、永
速に續けられる戦であると覺悟しなければならぬ。

「示すに徳教をもつてせむに、猶服はざることあらば、即ち兵を擧げて撃つ」

今日の國民教育の根本を具體的に考へると、即ち、この武徳一致の精神に生きる戰士の養成
にあるのである。しかも、今や吾々は、

「即ち兵を擧げて撃つ」

の聖戦に全力をあげてゐるのである。此の聖戦が完遂せられるか否かは、我が國、國防國家
體制に筋骨を永遠に入れ得るか否かに決するのである。もし、このことの成らぬに於ては、或
はこの世界轉換期に處する我が國の進路に、思はざる障碍を齎すやも保し難い。

銃後を守る吾々教育実践者たるもの、こゝの思ひを深くし、此の世界戦争を通じて、我が國に永遠の榮光あらしむる爲には、この精神を徹底の上にも徹底を期する以外に、道がないことを知らねばならぬ。

必勝の勝をかためよ國まもる

おのもくの職場に立ちて

海と空たゞ一いろにわが軍

かちどきあげてあけそめにけり

進撃に進撃をつづけ、米英最後の據點として死守すべく箱城を決したシンガポールを、すぐ眼の前にみて身命をさゝげてゐる將兵を思ふにつけても、吾等は教壇を戰場と覺悟して銃後の教育に狂ひがあつてはならぬのである。縣下五千餘の同志よ——吾等は足並を揃へて、只進撃に進撃をつづけ様ではないか。

本來の教育

今や本來の力を復歸した帝國日本は、たゞ世界驚嘆の裡に太平洋上海の皇國となつてしまつたのである。雄渾と言はうか、壯大と言はうか、世界に比類のない三千年の尊き歴史が、こゝに天業恢弘の炬火を新たに高く、しかも堅くにぎり、八紘一字の大理想が愈々實現されつゝあるのである。

思へば和寇と呼ばれ、明國を恐怖せしめた八幡船は、臺灣呂宋より安南印度洋にも及んだものだが、彼等もまた、利慾と領土蠶食に夢を追ふ野心は愈々露骨となり、その容易ならざる結果を招來したので、鎖國の止むなきに至つた日本は、遂ひに世界から孤立するに至つた。だが太平の夢は決してそれでつゝかなかつた。和蘭に代つて海上權を握つたイギリスと北方から南下して來たロシアによつて、日本は南北の進撃をうくる多難の國勢となつて、幾多の對内的な問題に其の一日の苦難を送らねばならなくなつたのである。

徳川三百年の封建制もこゝに一轉して明治維新となり、勿體なくも 天皇の御稜威によつて統一せられたのである。明治から大正、大正から昭和となつて、孤島の日本は東洋の天地から東亞の指導者となり、今や世界新秩序建設の大使命を兩肩になつて戦ひつゝあるのである。

然るに、本来の力を復歸した日本の國民教育の重大な責を負つて立つてゐる教壇實踐者の多くは大正の末年に生れた人達である。しかも、もの心のついたのは昭和もなかばを過ぎてゐることであらう。彼を思ひ、是れを思ふ時、教壇の愈々眞剣なるべく心構へを新たにしなければならぬことを、一層強く反省されるのである。

私は、幾度となく、日本の世界觀にたつた東亞の天地、世界の新天地を憶念しなければならぬ教壇を主張して來た。言ふまでもなく、世界戰史を新たにした大東亞戰爭も、一に御稜威の然らしむるところに、教育の徹底をみなければならぬのである。然るに、今もつてその徹底をかいてゐる教壇があるのではないかと杞憂するものである。教壇は遊びどころではない。居候氣分の教壇は、最早ゆるすべきことではない。是れと同時に、教育に關心をもつ多くの識者も教育の缺陷不備をひとり實踐者個人にのみその責を問ふことをせず、國民的連帶觀のもとに自ら起つて協力者となるのでなければならぬ。足らざる力を賣めるのではなく、吾が子の爲にもお國の爲にも相ともに教育の充全を圖るべきことを忘れてはならぬ。私は常に同人に言つてゐる。

「何にしても勉強せよ。勉強したら働いてくれ、働いたら勉強してくれ、ゆめ怠つてはな

らぬ。」

と、更に、

「時局を憤念せよ、興亞教育の具體化はそこから生れくるのだ。」

と、吾等はよい日本人を養成しなければならぬ。孤島であつた小さな日本の善良な國民ではなく、アジアの盟主として、東亞の指導者としてのよい日本人を養成しなければならぬ。限られたせまいところに國防線を築く様な新興東亞の善良な日本人ではなく、世界の歴史を、世界の秩序を新らしく建設する大東亞の指導者たる善良な皇國日本人を養成するのでなければならぬ。八紘一字の大理想も、其處にあるのではあるまいか。わが日本の國家理想、我が國民教育不動の目的も新しく其處にひらかれたのではあるまいか。即ち、内には肇國の精神を昂揚し、國體を愈々明徴にし、萬世一系絶對不動の皇位を中核として、一億同胞の血の結束を固めることである。外には東西古今の文化の精髓を攝取融合して、高貴豊饒な文化を建設し、幾百年の長い桎梏に重壓せられて來た有色人種のために、明朗澄利たる雄飛の前途を開拓し、歐亞の勢力の公平妥當な均衡の下に、永遠の世界平和を構築することである。

新らしい教育方法はこゝに樹立されるのでなければならぬ。日本の世界觀の闡明徹底はこれ

が具體策でなければならぬ。内なる備へは外なる發展の力となるのでなければならぬ。外なる發展力は内なる完備の充實力となるのでなければならぬ。目的は新興生成發動の働きであり、内容は生命に蘇り、血肉となつて日本國民の實力を養ふのでなければならぬ。

しかも是れは、教育者にだけ與へられた固有の責任であることを忘れてはならぬのである。従つて、自らの誇りと責任を抛棄することなく、自らの存在と理由を否定することなく、日々の研鑽と試練を怠つてはならぬのである。若し、縣下五千有餘の教師にして、私的な趣向や獨斷に囚はるゝことなく、一時の流行や傳統に執着することなく、穩健中正にして、しかも銳利強靱なる方法と理論に生き、實踐一如の眞摯熱烈なる日々の教壇にあるならば、身は砲煙彈雨の第一線にたつて居ないとしても、爆彈をふところに抱いて戰場に突撃するその身の尊さと變ることがないのである。

かくして天壤無窮の皇運を扶翼し奉るべき善良有爲の日本國民を育成することが出来るのである。

國民學校令

國民學校令

新たに發足した國民學校教育の原理、内容、方法は、國民學校令第一條にはつきり示されてゐる。更にこの目的をもつて兒童を教育するに當つての、特に留意しなければならぬ點を、國民學校令施行規則第一條に、これもはつきり示されてゐる。

而して、この目的を達成する爲には、如何なる教科によつて行ふべきかといふことも、また施行規則の第二條に明らかになつてゐる。例を國語にとるならば、尙更にその一教科の國民科の一科目である國語は、如何なる位置に置かれ、如何なる使命のもとに教授しなければならぬ

かを、その第四條に示されてゐる。

國民科國語の分科である「讀み方」はかゝる一本建の目的使命のもとにその一つ／＼が教壇に生活として現はれて來なければならぬことを、その學年の教師用書に詳細に説かれてゐる。

日々の教壇に狂ひのない生活を続けようとするならば、先づもつて法令の研究をしなければならぬ。縣下五千餘の同志——否助教なるが故に、准訓なるが故にまだ一度も手にせぬ同志があるとするならば、今からでもおそくはない。何れの學校にも備へ付けてある筈だから、
第一に

「國民學校令及國民學校令施行規則」
を研究し、第二に

「國民學校教則案説明要領」

を研究し、第三に

「國民學校教科書編纂趣旨解説」

を研究し、第四に

「各教科々目の教師用書と教科書」

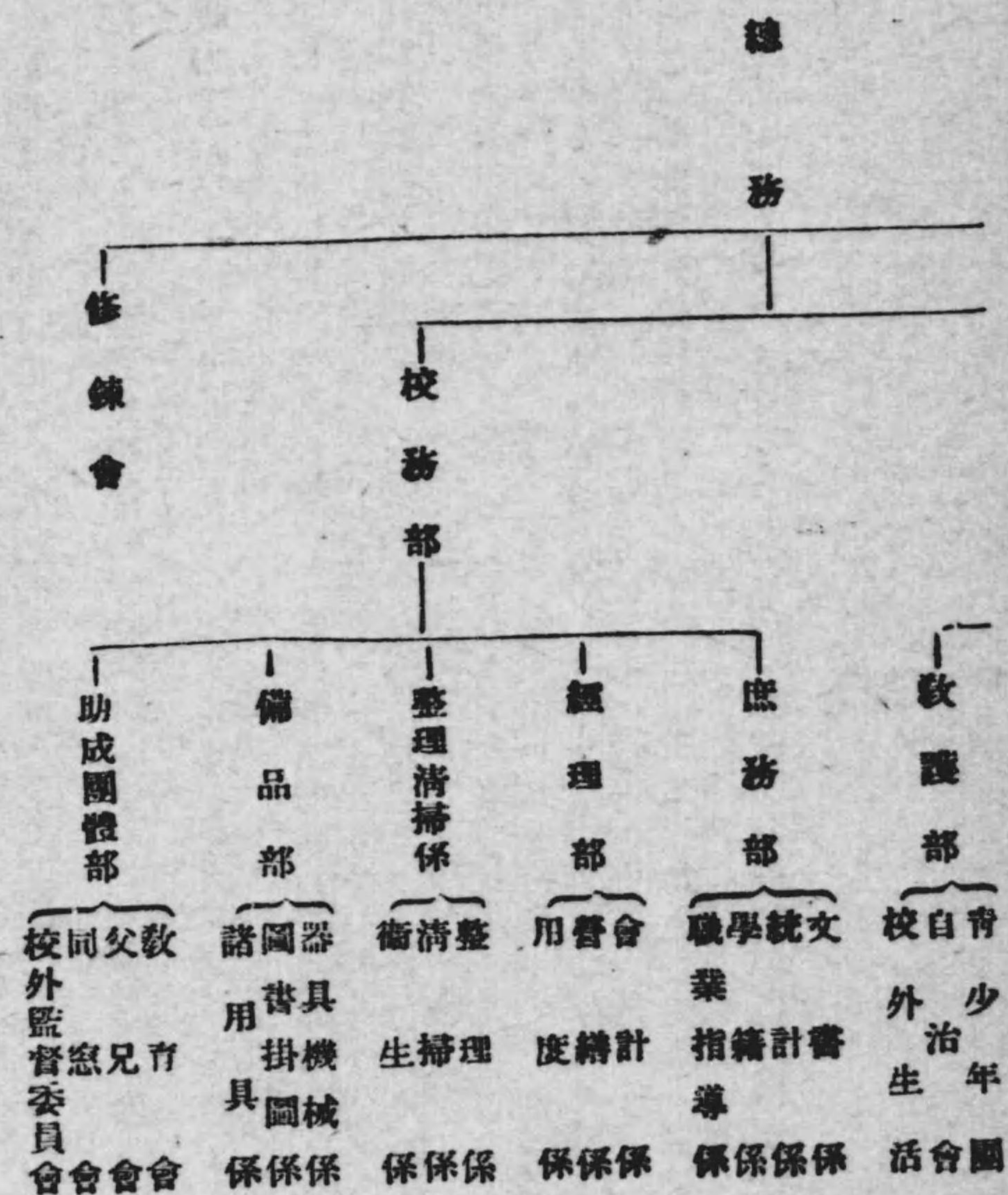
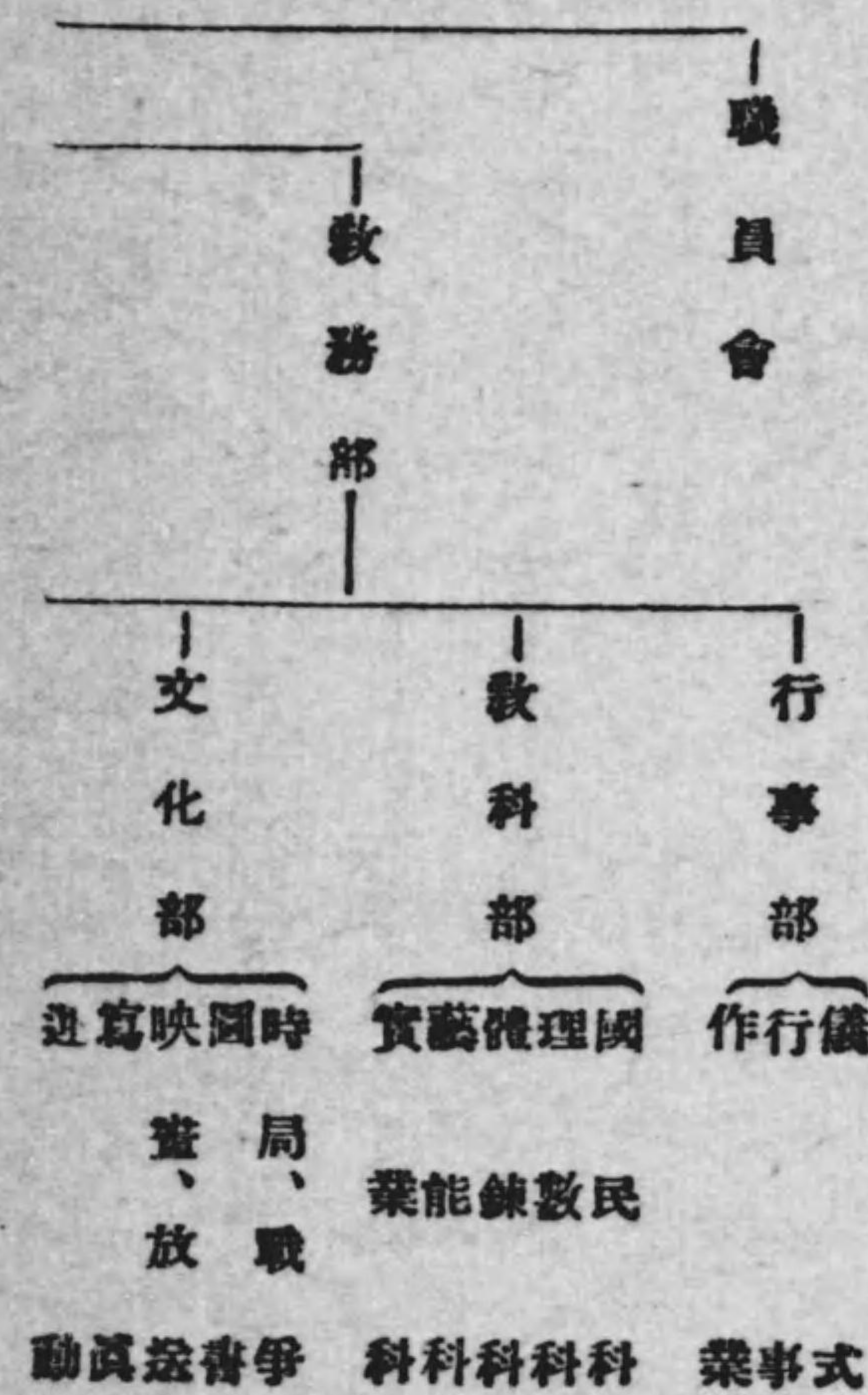
を研究したあとで、更に参考書なり雑誌なりを手にすべきである。稍もすると、かうした方面の研究は、學校長や教頭のすべきことで、吾々は参考書や雑誌をみて授業案を書き寫せばいいのだと考へ勝である。これはまことにおそろしいことで、極端に言ふと學校長は讀まなくとも、直接教壇に立つ教師は是が非でも讀まなければならぬ。ことに教師用書には、その根本精神から具體方法まで實に詳細に述べてゐる。もしこの一冊を丹念に讀みとるのであつたら、一切の参考書は無駄なことであらう。

是れはひとり初等科一二年を擔任してゐる教師だけの問題ではなく、教壇にたつてゐる教師の全部が必ず一度は手にせねばならぬことである。ことに初等科一二年の教師には、毎日一讀三讀して日々の授業案に狂ひのない様に、用意の充全を期すべきことが大切である。

縣下五千餘の同志へ再言する——初等科各學年各教科々目の教師用書を丹念に讀んで貰ひたい。どれ程多くの参考書を讀んでも、これ以上血となり肉となるものはない。そして、堅實な正しい教壇の力を得ようとすればこれが最も賢い研究なのである。

機 構

問題を具體化するために、我が校の經營の實際項目を中心にして述べることにする。
 國民學校の經營にあつて大事な條件の一つは、その機構を明かにしてお互ひの活動目標を提示することである。しかも、所謂幹部級のみでこれを獨占することなく、また若きが故にこれを忌避することなく、全職員必ずその機構の一切の責を負ふことである。
 機構の概要を示せば次の通りである。



總務は學校長で、教務部主任は教頭、校務部主任は次席である方が運営上妥當であることと思ふ。同人の總力の重點方向は職員會で明らかにすることが原則である。そのためには、常にお互ひの修練が肝要である。下からこれをみれば、各部で計畫した問題は職員會で同人全部に

明示され、これが実践は總體の修練會によつて修練されて行くのである。一例を述べるならば例へば教科練成部で、國民科國語の教壇修養を計畫すると、その具體案を職員會に提出し、決定するとこれを修練會として實施するのである。

教務部と校務部と二つに大別したのは、その實踐の内容を明らかにするためである。即ち教務部は主として學習練成の部面で校務部は主として事務處理の部面である、共に學校經營の全面總力であつて表裏一體のものである。教務校務共に教育の動きであることを考へるならば、校務といふことに對して從來抱いてゐた所謂事務的整理の考へを一掃してほしいものである。

更に教務部を四部に、校務部を五部に分けたが、もし出来ればこれを更に各係から小係に分けて同人全體の動きを活潑にすることが大事である。かくして、助教も准訓もみな教務校務の兩部面から經營の實體に參じて行くことを怠つてはならぬ。系統だてられた機構の運営は、そのまゝ戰時體制の學校經營ともなるのである。たとひ傍系の官署や團體からいろ／＼な依頼があつたとしても從來よくみられた様に騒々しい兒童の自習の姿をみながら一部の教師のみが事務の處理に忙殺される様なことがなくなることであらう。

國民學校の實體

今までは随分と苦言を述べて來たが、實は自らへの苦言であつたかも知れぬ。だが、苦言を素直にうけいれる心構へがお互ひにあると、苦言は必ず良藥となることであらう。もし、この良藥を素直に呑んでくれる教師が多ければ多い程有りがたいわけである。

良藥の第一は、國民學校の實體を早く掴むことである。國民學校の先生になつて、國民學校とはどんなものであるか、其の實體が分らずにゐる様であつては大變である。處が、此の大變なことが、ひとり助教の先生ばかりではなく、下手すると新卒の先生までうつかりしてゐるのを見るのである。それでは、どうすれば國民學校の實體を掴むことが出来るであらうか

(1) 國民學校令

それには、まづ國民學校令を一通り研究することである。國民學校令には、國民學校の目的から、課程編制、職員のことから設備經費管理監督にいたるまではつきり示されてゐる。是れを知らないでは國民學校の教育も出来ないし、教師としての責が分らぬ筈である。一例を職員

のところにとつてみても、小學校時代になかつた「教頭」を置かれたことも其の責務を明らかにされてゐる。また代用教員ではなく助教になつたことも教へてゐる。是れ等を知ることによつて、自らの責務は、學校經營の何れのところにあつて、どんな力になつてゐるかといふ使命も明らかになるのである。

(2) 施行規則

次は、國民學校令施行規則の研究である。施行規則には、國民學校令に基いて、如何なる點に留意して教育しなければならぬかを、はつきり示してゐる。更に各教科各科目の要旨使命は勿論、學級の編制から、授業せざる日のことから、免許狀、檢定、學務委員のことまで教へてゐる。准訓導助教に關する條文まではつきりしてゐるのである。これを研究して居れば、助教を三年もやつて未だ准訓導になつてゐない様な先生がない筈である。

(3) 施行細則

次は縣で制定した細則である。學校令と規則は全國的のものであるが、細則は縣の實狀に即した規則である。檢定及免許狀に關する細則には試験檢定の科目や檢定科無試験出願の手續きまで書いてある。職務及服務に關する細則には、缺勤のことから、忌引のことから、出張旅行

のことまで定められてゐる。

是れを讀んでみると、自分の學校の學校長がやかましい校長であるか、やかましくない校長であるかゞ分る。そして、やかましい校長の學校にはまちがひがないことがよく分るのである。

以上によつて國民學校の法規によつての實體が一通り分るわけであるが、更に別な角度からまた研究することによつて其の實體を掴むことが大事である。

教則教科の研究

(1) 教則の研究

それは、國民學校の教則の研究である。参考書としては、國民學校教則案説明要項といふものがある。條文として分つても、なか／＼其の精神を把握することが困難であるから、此の解説書によつて研究することが大事である。しかも條文の字句の一つ一つにまで親切に説いてゐる。

(2) 教科書編纂趣旨解説

教則の研究について大事なことは、國民學校教科書編纂趣旨解説の研究である。是れは、前の國民學校教則案説明要項の姉妹篇として編纂されたものである。言ふまでもなく、國民學校制度の内容を理解することは國民の義務である。國民學校制度改正の要點は、皇國民の鍊成といふことにあるが、如何にして其の目的を達成すべきか、それに必要缺くべからざる條件のうち、最も重要なものゝ一つは、國民學校の教科書である。それは國民學校訓育の内容目的を最も端的な形に具象化したものであるからである。此の意味に於て國民學校教科書の十分なる理解は、其の制度の根本精神の理解と同様に、國民學校制度の成否の分るゝところである。

(3) 教師用書

若し是れに、教師用書を丹念に讀むならば、教科書の研究はいさゝかも杞憂するところがない。従つて、雑誌や参考書の頁をたぐつて教案の書寫しをしなくともいふのだが、其の教師用書さへ靜かに讀んでくれる時間のない教師の多くあることを遺憾に思ふものである。

國體の本義

さて、問題を飛躍させて國民學校の根本精神はどこから來たかを考へてみたい。然らば、國民學校の根本精神は如何なるところに基づいたのであらうか。それは、國體の本義である。それでは、國體の本義といふことを明らかにするにはどんな本を研究すればいゝかと言ふと、

(1) 國體の本義

第一に「國體の本義」といふ本を研究することである。是れは、肇國の由來を詳かにし、其の大精神を闡明すると共に、國體の國史の上に顯現する姿を明示してゐる。更に進んで、是れを今の世に説き及ぼし、而して國民の自覺と努力とを促してゐる。たゞし、此の本は此のまゝでは少し六かしいが、解説したものが澤山出てゐるから、其れらを参考にして研究するとよろしい。

(2) 臣民の道

次は臣民の道である。國體の本義は國民の據つて立つ所を明らかにしたのであるが、此の書

は國體の本義に基づいて、皇國臣民の道を明らかに示してゐる。其の序言に

「皇國臣民の道は、國體に淵源し、天壤無窮の皇運を扶翼し奉るにある。それは抽象的規範にあらずして、歴史的なる日常實踐の道であり、國民のあらゆる生活、活動は、すべてこれ偏へに皇基を振起し奉ることに歸するのである。」

とある。臣民の道は日本人の道であり、國民道德の根本である。皇國臣民の道は國體の本義に基づいて、現御神にまします 天皇に絶対隨順のまことを致すことに外ならないのである。

郷土研究と經營案

以上の研究が出来たならば、次は郷土の研究である。我が郷土は如何に育つて来たか、そして如何に育ちつゝあるか。更に如何に育つて行くことであらうか。其の郷土を知ることによつて、郷土に育つた兒童の生活も知ることが出来るのである。その郷土を知らずして其の郷土の教育をなしたゝせよととしても、それは随分と困難を伴ふことであらう。

郷土の研究は反面的であつてはならぬ。常に郷土の全面的な立場を忘るゝことなく研究することである。

此處まで研究が進んで来た時に、實は初めて動かぬ學校經營案や學級經營案が生れて來るのである。しかもかうして出來上つた經營案は、その學校独自の立場に置かれた永遠性をもつてゐるのである。従つて、かりに學校長が變つても、教頭が轉任しても、動かぬ經營案であり變らぬ經營案としてうけつがれることであらう。學校長が變るたびに、裏と表の様に變る様な經營案は、決して私の望む經營案ではない。

新しき實踐者

無能だと批難しても、有能だと賞めそやされても、七十餘年といふながい間、みんな小學校といふ故郷のあたゝかいふところに抱かれて育つて來た教師であるからには、どうしても傳統的な生活に囚はれてゐることを否むわけにはいかぬ。また七十餘年の老齡にもなつた小學校で

もあつてみれば、巻録することもあらうし、時代後れの物語りもすることであらう。けれども七十餘年の昔をふりかへつてみれば、それは營々として瞬時もたゆみなく歩いて來た皇國の民としての鍊成の努力であつたのである。さうした點に對しては、事を論ずる前に多少の同情があつて然るべきであらう。しかし、その未練を舊體執着の未練とせず、新たに燃えあがつて來た革新の聲ときくならば、教育の新體制にそれがゆるされない意圖もはつきり自覺されることであらう。何故ならば、國民學校は單なる制令の改革ではなく、國民教育自體の生れ變りであるからである。恰も三百年の武士教育が退陣して、明治の新たなる教育が生れた如く、明治の西洋かぶれの教育が總退却して、昭和日本の新たなる教育に生れかへつたのである。しかしてもし、教育の新體制が舉國一致、舊弊を一洗して高度國防國家への發足を企圖する一面の使命を持つことであつたら、所謂個人主義、自由主義の思想を一掃して、たゞ一途皇運扶翼の大願に生きて行くことを念ずるのでなければならぬ。

蝸牛角上の争ひは教育界の常弊であつた。小さく是れを我が縣にだけみるにしても、僅か五千餘の同行の志が一として採長補短協力的美果を收めたことはない。一部を誇り、二部を去り檢定をさせ、助教を輕んじて對立的な感情の争ひは常に絶えなかつたことを反省されるのであ

る。否、一校の間に於てさへ一校一心和衷協同のうるはしさをみることが出來得ない状態にあつた。

新體制の教育内容は國民學校の指示するところであるから、こゝには言ふべくもないが、あらゆる教材、科目、教材方法が、皇國の道に歸一する皇國民の基礎鍊成にあることを寸時も忘れてならぬことである。八紘一字の建國創業の大理想實現の具體事象が、大東亞共榮圈の確立と共に次々と示されてゐる。しかも、日獨伊三國同盟によつて、日本は大東亞新秩序建設の指導的地位を、獨伊はヨーロッパ新秩序建設の指導的地位を世界に提示するに至つて、銑後の護りの第一線に立つてなさねばならぬ吾々教育實踐者の大使命は、まさに教育殉國の意氣と信念に生きねばならぬのである。

一世の木鐸として一生をさしげねばならぬ吾々教育實踐者は、宜しく世俗の卑事にこび、世の追隨者を以つて甘んじて來た過去の頹廢的氣分を一掃して、一村一郷の上に敢然と立たねばならぬ。

謂ふまでもなく、吾々教育實踐者の本務は兒童の玉成教化にある。随つて、教壇を除いては吾々教育實踐者の生くべきところを持たぬのである。しかもその教壇は、決して從來考へて來

た様な、四、五の教室に置かれた教師のたつてゐる教壇を指してゐるのではない。児童の生活するところ凡てこれ教壇であらねばならぬ。教室は勿論、講堂、校庭、廊下凡てこれ児童の生活道場である。道場を餘處にして教育の教壇はない。児童と共に學び、児童と共に進み、児童と共に育つるの念願を忘れた教育実践者の雑務は、一切これを統一してその本然の道に精進するのてなければならぬ。

それが爲には、先づ教育実践者自らの再認識を新たにせねばならぬ。即ち、國民學校制度の改革實施に先立つて、教育者その人の覺醒と自覺を新たにせねばならぬ。私心を滅して公に奉ずる教育新體制と共に、自らの周邊を淨化し、改革して子弟同行の心に立歸り、身を以つて教育に當らんとする志士的態度を持つことは、刻下の急務とするところである。

聖戰七年、いつ果つべしとも分らなかつた支那事變も全く變貌して、今や支那一國の問題ではないのである。世界を相手に日本の運命を賭する死活の問題である。この事を考へると、新體制が目標とする高度國防國家建設充實の爲には、一切を投げ出してかゝらねばならぬ。教育実践者は、かゝる決心をもつて新體制の制度とその運営に處する覺悟をもたねばならぬ。

實踐 學校經營と教壇

(出版會承認イ一五〇一〇三)



昭和十八年八月十五日印刷 (五千部)
昭和十八年八月二十日發行

●定價參圓六拾錢
特別行爲稅
相當額 二十錢 合計參圓八拾錢

著者 田浦安次郎

發行者 一杉章

印刷者 天野民夫

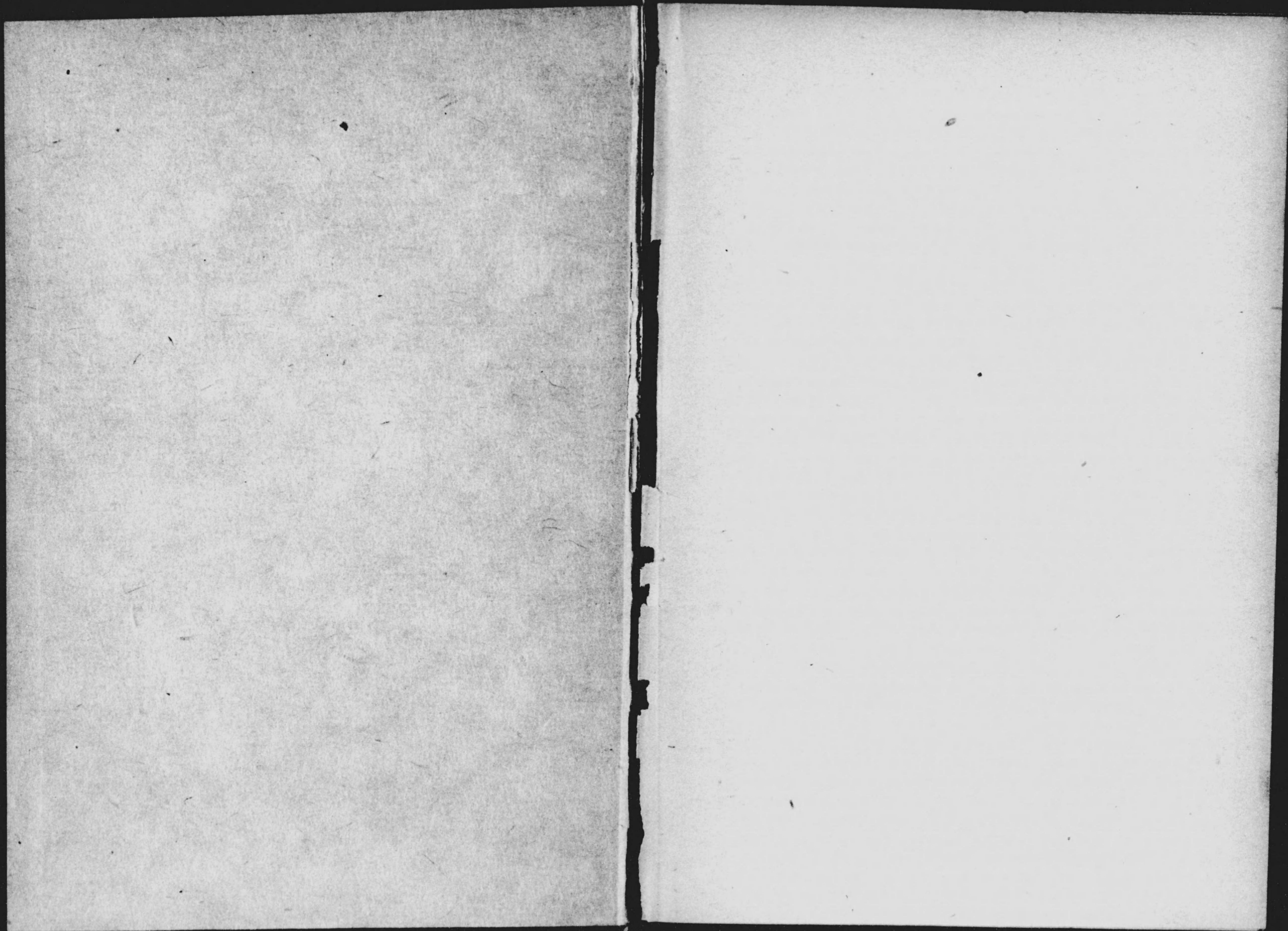
東京都豊島區池袋二ノ九二四

配給元 日本出版株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

發行所 一杉書店

東京都神田區神保町二ノ二八
振替東京一〇七四一二番
電話九段(23)一三三三六番
會員番號一二七〇四八號

(東京1901 株式會社 正明會印刷所印行)



272

234

實價(稅込) 至 3.80